
適当なポケモン系のアレ

N e 本

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

適当なポケモン系のアレ

【Nコード】

N4229Q

【作者名】

Ne本

【あらすじ】

まあ、あれです。

ノリッスよ、ノリ。

そんなノリで大して好きでもないポケモン小説書こうと。

一応連載という形になってますが、話数としては短くコンパクトに

まよふことは思つておられます。

アレな感じ

清々しい程の青空。

心地よく吹き抜ける秋風と、涼やかな気温。

「絶好のお散歩日和ね。」

伸びをしながら歩いている少女の名は、こなた。

実に著者の好みが分かって頂ける名前だろう。

彼女が歩いているのはトキワタウンという町であり、これはよく知りもしない癖にポケモンネタを書こうと決めた作者の無謀作品である。

「さて、と。」

何をしようかしら」

特に何をしようかと決めたわけでもなく、天気の良いにつられて外

に出てしまった為、とりあえず行くところはない。

「ええと…」

とりあえずフレンドリーショップにでも…」

「ちよいちよい。

ちよいとお嬢ちゃん」

ふと声をかけられ、見た先には…

「ゲツ…怪しい…」

見るからに珍妙な格好をした、青年とポケモン。

「怪しいとは失礼ですよんか！

この通り、ボクはポケモン漫才師やってますねん。」

「はあ？」

聞いたこともない珍妙な職業である。

「聞いたこともない珍妙な職業ね。」

「同じ文章を二度もくりかえさんといて下さい!？」

「ポケモン漫才師ねえ…」

「なんですかその目は！

よし、ほな見せたるうやありませんか！
いくでっ！ブイ！」

「ブイブイ！」

ブイというのは怪しい男の傍らにいる、イーブイのことだろう。

1人と1匹は、並んで一礼をする。

「はい、よろしくお願いしまーす」

「ブイブイ」

どうやら唐突に漫才が始まったようだ。

「いやあ、こう見えても僕、昔はワルでして。」

「バイバイ」

「そう！まさに！」

「バイバイ」

「言わせてた！ってことすな！」

「一斉にこちらをどや顔で見つめてくるヘンテココンビ。」

「正直、ものスゴくウザいわ……」

「かーっ……厳しいのう、お嬢ちゃん……」

「バイ……」

ガックリするバカ達。

「まったくもって面白くないわ。
不快なだけね。」

「キツツいのう……」

「バイバイ……」

「いや待つんや、バイ！
このお嬢ちゃん、今巷で噂の『シンデレ』っちゅーやつやないか！
？」

「バイ？」

「一旦キツいことを言っておきながらその後思わずキュンとする
ようなことを言ってくるハズや！」

「ちよっ！

何意味の分からない設定を私に押し付けてんのよ！」

「お嬢ちゃん、これはフリやで？
空気読んでや」

「クッ…」

あつ、アンタ達の漫才ぜんっぜん面白くないのよ！
まあ、でももう一回くらい見てやってもいいけどっ
」

「…………お嬢ちゃん」

「なっ…何よっ」

顔を真っ赤にしたこなたに男は告げる。

「アカンわ

お嬢ちゃんは『ツンデレ』やないで。」

「は？」

「『ツンキモ』や。」

「その『キモ』は気持ち悪いの略かしら…？」

笑顔のままパキパキと拳を鳴らすこなた。

この後、漫才師は彼女が空手の有段者であることを身を持って知る
ことになる…

つづく。

アレ

「なあ、お嬢ちゃん。」

「何よ？」

「一つ、聞いてもええやろか？」

「うん」

「病院って…どこッスか…」

盛大にフルボッコにされた漫才師は、生まれたての小鹿並みに震えていた。

「さあ。ググれば？」

「それが瀕死の人間に対する態度！？」

「ブイブイ…」

2人のやり取りを見て、イーブイが溜め息をつく。

「ハア…仕方ないわね

とりあえずポケモンセンターにでも行ってみましょ」

こなたの慈悲深い(?)一言で一行はポケモンセンターに向かった。

「はい、とりあえず傷の手当ては終わりましたよ。」

につこりと微笑むジョーイさんは漫才師にはこの世に顕現した天使に見えたという。

そして今さらながら、

「ジョーイさん」って「女医さん」をもじったシャレじゃね？
あれ、ってことは「ジュンサーさん」って「巡查さん」じゃん！
マジ大発見！と思った作者であつた。

「それにしてもすごい怪我ですね。
野生のポケモンにでも襲われました？」

と、ジュンサーさん。

「ええ、まあ…
そりゃあもう凶暴なやつに…」

と、漫才師が言いかけたその時。

「どうなつてんだよこの町！
いつ来てもジムリーダーがいねえじゃねえか！」

と、荒々しい声がセンター内に響き渡る。

「なんや、物騒やな

うるさいのう」

そんな漫才師の言葉に、少し困ったような顔をしたジョーイさんが口を開く。

「ええ…」

少し前にこの町のジムリーダーが変わったらしいのですが、そのジムリーダーはジムに居ることはおろか、姿さえも誰も見たことがないらしいのです…」

「へえ、そりゃとんだロクデナシやな」

「ジムリーダーがいないのですから、ジム戦に来るトレーナーの憤りも溜まる一方です…」

「つたく。」

この町のジムリーダーは何やってんだが…」

こなたも苛立ちを露にする。

「へえ…」

こと興味なさげな漫才師が気のない返事をする。

「まあ、とりあえずアンタの傷の手当ても終わったし、どこかご飯でも食べに行かない？」

「おお、そりゃええ。

僕、ちよつどお腹空いてたところですねん」

そんな会話をしながらポケモンセンターを出た一行であった。

が、

「おい兄ちゃん」

「ん？」

僕のことですやろか？」

「あ、アンタさっきポケモンセンターで大声出してた…」

漫才師に声をかけたのは、先程ポケモンセンターで見た男であった。

「何の用ですやろ？」
「あつ！漫才見たいんですか？」

「はあ？何言ってるんだ
兄ちゃんポケモン連れて歩いてんじゃないか」

「ええ。まあ。」

「こちらジム戦がおじやんになって不完全燃焼なんだ。
バトルしてもらっぜ」

「ああ。ポケモンバトルですか。」

「おう。
かかってきな！」

「ほんなら遠慮なく…
いくで、ブイ！」

「ブイブイ！」

「全力ダッシュや！」

そう言い残し、脱兎の如く駆け出すバカコンビ。

「ちよっ！おま…っ」

「ナハハハハ！

すいまっせーん！

僕暴力とか嫌いなんでー！」

「あっ…アンタ！

私を置いていくんじゃないわよ！」

呆気にとられた男を残し、漫才師のおかしな笑い声は遙か彼方へと遠ざかっていった。

つづく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4229q/>

適当なポケモン系のアレ

2011年10月8日16時53分発行